

「異端」が照射する時代の核心——経済小説作家たちの闘い

加藤正文

(神戸新聞特別編集委員)

七十九年の生涯で二百十四作品を出した経済小説界の巨人、清水一行（一九三一—二〇一〇）。その本格評伝に後進の黒木亮が挑んだ。実証を旨とした緻密な作風の黒木だが、本作は新境地を切り開いた先輩作家に寄せる敬慕の念が加わり、高度成長期の日本経済の熱気をはらんだ臨場感あふれる作品に仕上がっている。登場人物名、組織名はすべて実名というこだわりぶり。黒木は編集者だけでなく、清水の妻に話を聞き、自宅の書斎も見た。「亡くなったときあれだけの偉大な作家にもかかわらずこの扱いかと感じた。経済小説は文壇からキワモノ扱いで異端視されやすい。僕もそれを常々感じている。だからこそきちんと書いて後世に伝えようと思った」

小説であれ、ノンフィクションであれ、読者を魅了する華のジャンルは人物評伝といっ

てよい。その時代に起きた出来事に主人公がどう反応し、どんな行動を取り、何を発言したのか。どんな仲間が集まり、ともに何を生み出したのか。その軌跡は同時代の実相を映し出し、今に至る課題を浮かび上がらせる。『トップ・レフト』『アジアの隼』『巨大投資銀行』といった国際金融小説の書き手として知られる黒木だが、創作の背骨に人物評伝の精神がある。神戸を本拠に鉄一筋に歩み、高度成長の扉を開けた川崎製鉄（現JFEスチール）初代社長、西山弥太郎を描いた『鉄のあけぼの』（二〇一二年）、東京電力福島第一原発の事故時の所長、吉田昌郎をモデルにした『ザ・原発所長』（一五年）、東京スタイルの高野義雄がモデルの『アパレル興亡』（二〇年）、そして経済小説作家、清水一行に迫った本作『兜町の男』（二二年）の四作の本格評伝がある。その中で実名で書いたのは『鉄のあけぼの』と『兜町の男』だ。両作品は黒木の評伝文学の到達点を示すとともに四半世紀に及ぶ作家活動の画期をなす作品といえるだろう。

知られざる巨人

清水は週刊誌記者を経て一九六六年、証券業界の内幕を描いた『小説兜町』[※]でデビューした。新幹線の騒音公害をめぐるサスペンス小説『動脈列島』で七五年に日本推理作家協会賞を受賞した。実際の経済事件にかかわった人物をモデルに、戦後経済や企業の暗部、

事件の内幕を描く作風を確立した。経済小説界を代表する書き手だが、実像は意外なほど知られていない。東京都墨田区の娼家で育ち、戦後の焼け跡から身を起こした。共産主義者として活動した後、証券市場の心臓部である兜町をはい回り、躍動感あふれる企業小説を量産した。本作はルーツに迫ったところが出色だ。「玉の井」「ああ、インターナショナル」「藤原経済研究所」と章立てが示すとおり、物おじせず、バイタリティーあふれる青年は、高度成長期の兜町の沸き立つ相場の奔流にもまれながら、「元共産党員から経済ライターへと脱皮を遂げていった」。この前史が清水のその後の作風の通奏低音として流れていることがわかる。

本書の巻末に清水の作品一覧がある。これに沿って読んでみた。『毒煙都市』『秘密な事情』『雛の葬列』『風の骨』『小説財界』『頭取の権力』……。社会の暗部を描かせれば清水の筆がさえ渡る。大阪を舞台にした経済小説の古典的名著である『頭取の権力』をみよう。冒頭から情感あふれる作品世界に引き込まれる。

〈宗右衛門町の賑やかな通りを、道頓堀川とは逆な玉屋町側へ路地を少し入ると、いかにも野暮くさく映る紫色の、スナックへしべりや〉の看板が目飛び込んでくる。ミナミの街を彩る光の交差は、昔もいまも道頓堀川に揺れて泳ぐように映り、川を越えた遙かな難波球場の上空に、雲を赤く焦がしていた（本文より一部抜粋、以下同）

家電大手の内情に迫った『秘密な事情』は息を飲むリアリティーだ。「経営の神様」とあがめられたオーナーや往年の経営者たちの姿が生々しく浮かび上がる。綿密な取材と情報収集はもちろんだが、すくい上げたエピソードに創作力が相乗し、組織に生きる個人の葛藤やむなしさを浮き彫りにして余すところがない。清水作品は虚実緞い交ぜというよりも実をよりリアルに浮かび上がらせるために卓抜な虚が織り交ぜられるのが特徴だ。実際に起きた出来事をモチーフに生々しい会話が続き、そこに人間模様が浮かび上がる。この筆力の源泉である人間の業を見据える観察眼はどこでどのように培われたのか。繊細で律義で真面目、ひたむきに書き続ける態度。黒木が約四十人に取材し、十年余を費やして描いた人物像がこの評伝の最大の読みどころだろう。

『小説兜町』の衝撃

大家のデビュー作にはその後の活躍を予感させる才能のすべてが詰まっているという。清水の最高傑作『小説兜町』もまさにそうだ。相場に人生をかけた人間の躍動感と揺れ動く心理が活写され、発売後、増刷に次ぐ増刷となった。兜町と書いて業界では「しま」。東京証券取引所の周囲に大小の証券会社がひしめく株の街だ。相場を通じて日本経済の好

不況やバブル、恐慌の浮沈を体現してきた。本作の時代設定は第一次高度成長期。一九五六（昭和三十一年）年の経済白書が「もはや戦後ではない」と宣言したように、当時の日本は戦後復興を終え、神武景気（五四～五七年）、岩戸景気（五八～六一年）に沸いた。好調な企業業績を背景に株価は五五年後半以降、六一年までほぼ一貫して上昇を続けた。

〈「それで、書いた小説というのは、それですか？」。井家上（隆幸、三一書房編集者）が風呂敷包みを視線で示すと、清水はうなずいて、風呂敷を解いた。千二、三百枚の原稿が出てきた。四百字詰め原稿用紙に、右肩上がりの万年筆の文字でびっしりと書かれていた。「題は『兜町山鹿機関説』ですか？」。井家上は、原稿を受け取って、ざっと内容に目をとおす。題名はわかりづらいが、兜町の証券マンを主人公にした小説だった。（いけるかもしれない）。井家上の脳裏を期待がよぎる。（中略）

「清水さんとしては、なにを一番表現したかったですか？」「わたしは、神武相場と岩戸相場という二つの大きな相場のなかで、大衆が大企業に金を巻き上げられるのを目のあたりにしました。兜町で、なぜ、どのような仕組みで、大衆の金が巻き上げられていくのか。それを小説のなかで解き明かしてみたかったです」

スター相場師の山鹿悌司を主人公に据え、波瀾万丈の人生に高度成長期の株式業界の激しい乱高下を重ねた。黒木は「この小説の魅力は、符牒のような証券用語と相場関係者独特の短い会話を駆使して、株式市場の躍動感をあますところなく描ききっている」と評価した。出色なのは個性的な人物造形だ。巨漢の山鹿は精力にあふれる。平和不動産、本田技研や理研光学（現リコー）、ソニーなど目を付けた企業の株で大相場をつくり上げる。準主役の愛人で元銀座ホステスの千佐子は左翼活動家の西沢とも関係を持つている。将来も定まらず生活力のない西沢とは対照的に、相場という得体の知れない怪物と格闘し、常に前を向く山鹿のエネルギーにひかれている。鋭敏な人間観察力に裏打ちされたセリフにあふれる。相場の負けを挽回しようする山鹿が痔の手術をし、家を新築しようする。易者で大口投資家という謎の老人が叱る場面は秀逸だ。「人間の体で肛門は力の中心だ。あらゆる力は肛門から盛りあがる。その本体を手術しただけでも問題があるのに、城であるべき家を新築するなんてもつての外だ」。人間の業を知り尽くし、人の心の奥底まで見通しているような清水のまなざしを黒木は本書に映し込んだ。

経済小説の戦後史

経済小説の系譜をたどると城山三郎、梶山季之、清水一行の三人が先達となる。それま

で企業モノという源氏鶏太のサラリーマン小説が知られていたが、黒木は「経済の仕組み、メカニズムとともにそれに絡んだ人間ドラマを描いた。経済小説を切り開いたのが城山さんと梶山さんで、続く清水さんが分野として確立した」と分析した。本書は、サブタイトル「清水一行と日本経済の80年」にあるように経済小説が映し出す時代の変遷にも光を当てている。一九二七（昭和二）年生まれの城山は海軍の少年兵として戦争の不条理を体験し、「組織と個人」のあり方を追求した。三〇年生まれの梶山は『黒の試走車』『赤いダイヤ』が有名だ。清水は三一年生まれだ。この三人は敗戦と復興、高度成長の昭和を体験した作家だった。

平成時代に入ると三九年生まれの高杉良の活躍が目立つ。シリーズ「金融腐蝕ふしょく列島」などでバブルからその崩壊に至る時期を軸に金融や官僚、メディアの世界を写真した。黒木は経済小説の系譜で、質量を兼ね備えた「三千メートル級の高杉」として城山、清水、高杉を挙げた。近年は池井戸潤らの活動が盛んだ。ここへきて経済社会は一段と混迷し、複雑化している。だからこそ黒木は、人間の業に迫ろうとした清水の情熱を本作に込めたのだろう。

〈清水は、取材スタッフの一人、宗肖之介と軽井沢の追分にある油屋旅館で話をしていた。「…小説っていうのは、人間を描かなきゃいけないもんだよな」（中略）

「そうですね。経済活動っていうのは、常に根底に人間の思惑がありますから。原点は人間ですよね」

清水のそばにすわった宗肖之介がうなづく。(中略)

「そうなんだ。たとえば重役三人の闘争を描くにしても、誰がなにを考えてそういう行動をしたのか、それはどういう人生を送ってきた結果、そうなったのかを書かないと読者の心を掴めない。∴それを突き詰めていくのが小説の醍醐味だよな」

文庫化に際して黒木にインタビューした。出版界が縮小する中、経済小説はこれからどうなるのだろうか。「危機的な状況だ。曲がり角にある。近年、経済小説でデビューする作家も見当たらない」。だからこそ黒木はその可能性にかける。「どんな人がどんな顔でどんな場所で何を言ったか。物語にしてこそ臨場感や説得力が出る。物語の力はやはりすごい。難しさを超えてこそいい作品が生まれる。それは今回の『兜町の男』で感じた。やはり経済小説家は何かそとという反骨精神で頑張らないとダメなんだなっていうのが実感です」

本書の人物名、組織名等はすべて実名で、内容はノンフィクションです。

原稿用紙の「枚数」は、特に断り書きがある場合を除き、すべて四百字詰め原稿用紙の（またはそれに換算した）枚数です。

二二八ページから二二九ページに引用した『悪の公式』の原文は、差別的とされたものですが、読者が作品の雰囲気を理解できるよう、地名や過激な表現を削除して掲載しました。

甲山事件において殺人罪で起訴された元保母は、平成十一年九月に二度目の控訴審で無罪とされ、大阪高検が上告を断念し、判決が確定しました。

本作の単行本は二〇二二年十二月、毎日新聞出版より刊行されました。